

ともしび

茨城東組・茨城西組共催

慶讃音楽法要のご報告



井上直之

(釋直道)

先月のお彼岸で「暑いのもう飽きました」とおっしゃったご門徒さんがいましたが、この夏は本当に厳しい残暑が続きました。その後、急に下がった温度変化に身体バランスがついていかず、十月半ばに入ってからようやく秋らしさを感じている方も多いと思います。

さて、今年の六月二十二日

(土)には、茨城県の浄土真宗本願寺派のお寺が協力し、親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年を記念した慶讃音楽法要が水戸市民会館で開催されました。

宗願寺のご門徒も参加し、坊守とコーラスは舞台、私は法要の指揮者を勤めさせていただきました。

宗願寺は東京教区の茨城西組に属しており、今まで茨城東組の寺院と関わることはありませんでしたが、今回のイベントのご縁でたくさんのお寺やご門徒さんたちと実行委員会を立ちあげ、力を合わせ同じ目的を果たせたことは、私にとって大きな財産となりました。そして、私のことで恐縮ですが、

気づくと来年の二月には得度して二十年となります。僧侶になり、住職となり、あつという間の二十年間でしたが、振り返ると自分の力では何もできない私が、たくさんの方々に支えられ生かされてきた年月でした。これからも、ともに歩ませていただきたいと思っています。

報恩講は親鸞聖人のご命日を偲ぶ法要です。聖人は九歳で得度され、比叡山で厳しい修行をしたにも関わらず、見えてきたのは煩惱に満ちた自分自身でした。

そこで比叡山を降り、法然上人との出遭いから、煩惱を捨てれば救ってくれる仏さまではなく、煩惱を捨てられずに苦しんでいる我々こそ仏さまの救いの対象なのだということに気づかれます。

八百年経った現在でも、親鸞聖人のお念仏のみ教えは私たちに伝わっております。感謝しつつ、報恩講には皆さまとともにお正信偈をお勤めさせていただきたいと思っております。(住職)



親鸞聖人御誕生850年 立教開宗800年慶讃法要



宗願寺から参加された方々

慶讃法要に参加して

刈部俊一 (釋光俊)

芸術館の隣地に新たに建設された市民会館の大ホールには、仮設ではありますが立派な祭壇が設けられ、記念法要にふさわしい舞台にまず感心させられました。

法要は正念寺住職の導師の下で、東組と西組の住職等からなる結集・讃嘆衆・奏楽員が舞台の正面下手に控え、コーラス担当は我が宗願寺の井上住職の指揮、服部先生のオルガン伴奏の下、光徳寺の坊守さんも加わり、少数精鋭？で上手に陣取りました。

法要の中心は正信念仏偈で、結集とコーラスが同じお経を唱えることとなりました。個人的には喉の調子が悪く、ご迷惑をおかけした状態でしたが、何とか最後まで勤めることができました。

法要の後には、筑波大学名誉教授の今井雅晴師の記念講演と、京都出身のシンガーソングライターふくい舞さんの記念コンサートが続きしました。

今井先生の講演では、親鸞聖人の茨城の地での布教活動について、聖人の教えに導かれたのは主に武士が中心だったというお話には新鮮な驚きがありました。慶讃法要が開催されるまでに、関係者のご苦勞があったこと等を考えると、まずは滞りなく式典が行われ、加えてそこに参加することができたことを感謝したいと思います。(宗願寺合唱団)

秋嶺忌 (釋妙澄七回忌)

11月10日(日) 午前11時

成道会法要・バザー

12月8日(日) 午前11時半

修正会

1月1日(水) 午前10時

御正忌報恩講・新年会

1月12日(日) 午前11時

立春拝賀式・仏婦新年会

2月4日(火) 午前11時

永代経

3月2日(日) 午前10時半

成道会バザーについて

バザーを楽しみにしている、との言葉を聞き、嬉しく思います。

当日は正午から集会所にて開催されます。婦人会、壮年会、を中心に手作りの食品、日用雑貨等を販売いたします。

物によっては予約販売となりますので、興味のある方はお寺か世話人さんまでご連絡ください。

品物を寄付してくださる場合は、十一月末日を締め切りとして、集会所にてお預かりしております。

仏教壮年会 第2土曜日 午後6時
仏教婦人会 16日 午後1時半
宗願寺合唱団の練習 第3日曜日 午後2時半

母の七回忌を前に

井上由美子(釋 由真)



80歳くらいの頃の母

十一月八日、母の七回忌を迎えます。この六年間は、両親から託されたお寺のことを常に考える日々でした。

半分以上の月日はコロナ禍、私自身も二度整形外科に入院して、肩と両膝の手術を受けました。

コロナで世界中がパンニック状態だった頃、もし母が生きていたら介護の方法について悩み、自分が追い込まれてしまっていたのではないか、と思いました。母が罹患したら、それは私の責任です。

医師からは「何があってもおかしくない状態です」と告げられても、その言葉を信じず、母はまだ生きてくれると思っていました。亡くなったときも、それからの日々も「どうして？」と自分に問いかけ、母の死を自分はどう受け止めたら良いのか、思い悩んでいました。

それは母を好きだから生きていて欲しい、という単純な願いではなく、前住職がいなくなることに「重さ」への不安です。最後の頃は、認知症もあって、お墓やお寺のお金のことを質問しても、ほとんどまともな答えは返ってこなかったけれど、やはり、精神的に依存していたのでしよう。毎年、命日の頃「秋嶺忌」を勤めてきました。それは、母だけで

なく、父、祖父、曾祖父、井上家歴代の住職の法要として、ご門徒さんや親族、友人等が集う懐かしい一日です。

父母は、皆さんと集い、お酒をいただきながら歓談することが大好きでした。その思いは、今年の七回忌の後、かたちを変えてかええようと考えています。

現在、宗願寺は住職と坊守と私の三人を中心に活動しています。後継者が育ったことを、母は見届けて逝きました。有難いことです。二十数年前のこと。電話を受けた母がとても気取って「ジャスト・モーメント・プリーズ」とゆっくりと言い、受話器を抑えるなり「由美子！ユミコーツ！」とものすごい声で叫んだのです。

私が電話に出てみるとひどい訛りの英語が聞こえてきました。何を言っているのか聞き取れなかったので、相手の名前を尋ねると、当時編物の仕事でやりとりをしていた、毛糸の会社でした。イギリスとノルウェーの間にある北極圏の島からの電話でした。

あの時の、おすまして「ジャスト・モーメント・プリーズ」と言ったときの母の顔。大慌てで私を呼んだときの顔。リアルに思いつくことができず。滑稽で可笑しくて、今でも噴き出してしまいます。その後、泣きたくなります。

人が亡くなるということ、そして、その方をお寺で法事を勤めるといふこと。お寺の役目の大切さを感じて、お寺の役目を大切にしたい。お寺の役目を大切にしたい。お寺の役目を大切にしたい。

(副住職)

彩弥と弥那との日々

井上明寿子(釋 妙寿)

彩弥は三年生になり、一年生の弥那もランドセル姿が似合うようになり、二人とも学校に行く時間が増えたことで、友達のかかわりや責任が増え、世界がどんどん広がっているようです。

見えない部分を少しでも正しく判断できるように、親にできる「少し」の部分を実践させたいと思う日々です。

さて、ある日娘たちと反対言葉を言う遊びをしていたときのことです。

「熱い、冷たい」「動く、止まる」「長い、短い、あれーっ？」といった具合に順番で答えていき、何周かした頃に、彩弥が「がんばる、あきらめる」と言いました。

子どもらしい答えにクスッとなりましたが、少し違うなと思いつつも「頑張りなさい」と口をきかされた。でも私自身「諦める」の反対を思いつくことができず、悩んでいました。

調べてみると、答えは「執着する、粘る」でした。なるほど離れられない状態を指すのだな、と納得すると同時に、私たちは「諦める」ことを目指しているのに、何かに「執着せずにはいられない」生き物なのだ再確認しました。

諦めることを目指すというのは、おかしな表現ですが「諦」は、もともと真実を表す言葉で「明らか」に真実を観る」「正確に認識す

(坊守)

る」という意味があります。

それは偏見や想像にとらわれず、物事の在りようや事実を正しく受け入れるということです。何かに執着しては真実は見えません。だから私たちは一生懸命生きて手を合わせ、救いにおまかせするわけです。

そして、執着という自力の力から少しだけ離れると、自分の思い込みや思い込まされてきたことが少しずつ見えてきます。



彩弥(右) 弥那(左)

子どもにも南無阿彌陀仏の大切さを伝えていけるので、この頃はすんで手を合わせるようになりました。ただ、見えないだけに仏さまや神さまの違いが難しく、弥那は神社から通りがかりの噴水にまで手を合わせに行くようになりました。

そんなときは、作法が違うから必要ないよ、とは言いますが、やっつけたいとは言いません。子どもの成長を見守りながら、自分もその心根を見習おうと思えます。

編集後記

本堂前のイチヨウの周囲に立ち入り禁止のロープが張られたのは夏のこと。報恩講前になってもそのまま、皆さまにご迷惑をおかけしています。

折れた枝が危険なので、切ることにしているのですが、びっしり実ったギンナンが重く、処分代が高額になるので、葉も落ちた冬に作業することになりました。

後継者がいない、という理由での「墓じまい」が増えていきます。ご門徒さんとの手紙のやりとりや石屋さんとの交渉等、私の仕事としていっているので、深夜までパソコンに向かうことがよくあります。

ほとんどの方は、遺骨を合葬墓に納め、墓地を片付けます。合葬墓なら訪れる方も多く、毎年「永代経」には、皆さんでお参りしますから、寂しくありません。

両膝の手術が成功し、大勢で痛みから解放されるようになり、とても忙しく、コロナ騒動の終息を実感しています。その節は、ご心配いただき有難うございました。

合掌

発行・宗願寺門信徒会
編集責任者・井上由真
(由美子)
(印刷所・阿部印刷)

宗願寺ホームページ



宗願寺ウェブサイトURL
https://souganji.com/